

「ドストエフスキ研究会便り（１９）」

「ドストエフスキと親鸞」（１）

ドストエフスキ、イエス像構成の足跡 —ユダ的人間論とキリスト論—

芦川進一

★今回と次回の二回にわたり、２０１７年３月３１日、東京湯島の親鸞仏教センターで開かれた「現代と親鸞の研究会」に於いて、私が「ドストエフスキ、イエス像探求の足跡」というタイトルの下に提示させて頂いた「問題提起」と、それを受けて引き続きセンターの研究員の皆さんとの間で交わされた「質疑応答」の記録を掲載します。

★ここに掲載する全文は、既に親鸞仏教センターから発行された雑誌「現代と親鸞」（第３７号、２０１８）に掲載されています。今回「ドストエフスキ研究会」と「研究会便り」の趣旨を理解して下さい、雑誌からの転載を快諾して下さいセンターの方々には、心から感謝しています。掲載にあたっては、総題を「ドストエフスキと親鸞」とし、前半の「問題提起」を今回に、後半の「質疑応答」を次回に、都合二回に分けて掲載させて頂きます。

★今回の「問題提起」では、ドストエフスキ世界と聖書世界について、私が持つに至った基本的理解を、まず幾つかの「定義」の形で提示します。次にそれらを具体的に確認すべく、後期ドストエフスキの五大作品の中から『罪と罰』を選び、この物語を構成する七つの基本要素を取り出します。最後に以上のことを、改めて遺作『カラマーゾフの兄弟』に於いて、イワンの思索の歩みに沿って確認するという、三段階の構成となっています。

★次回の掲載は、今回の「問題提起」を踏まえ、親鸞仏教センターの研究員の皆さんと私との間で交わされた「質疑応答」です。掲載を二回に分けたのは、一度に多くの分量を扱うことを避けたということもありますが、主な理由は、「問題提起」から直ちに「質疑応答」に移るよりも、両者の間に一定の時間を置き、「問題提起」を受けて、皆さんが自分自身で思索をする時間を取って頂くためです。これが「ドストエフスキ研究会」の本来の趣旨に沿うことだと思うのです。

★ドストエフスキとキリスト教の理解を基に、親鸞と浄土教の世界にアプローチをするという試みは、少なからず困難を伴うものです。私の「問題提起」は、その大きな課題に対する、ほんの小さな試みに過ぎません。しかし親鸞仏教センターの研究員の皆さんもまた、親鸞と浄土教の理解を基に、ドストエフスキとキリスト教を理解することへの強い関心をお持ちで、「質疑応答」は熱気あるものとなりました。この研究会における対話の試みは、将来の両世界の相互理解と交流に向けた、確かな一歩となるのではないかと思います。

★なお今回の私の「問題提起」には、前二回でお話をした「ロシアの小僧っ子」のこと、殊にイワンが辿った思索の足跡のこと、イエス像の構成のこと、また大学闘争（紛争）や「絶対のリアリティ」や「ヌミノーズ」のこと、更には以前扱った「ユダ的人間論」や「キリスト論」のことなどが繰り返し登場します。皆さんがこれらの基本概念に少しずつ慣れて、まずはドストエフスキと聖書、両世界を理解するための土台作りを進めて頂ければと思います。

前半

〔問題提起〕

目次	ページ
1 はじめに	4
2 聖書世界とドストエフスキイ世界	5
1. 「ロシアの小僧っ子」	6
2. 「聖書世界」と「ドストエフスキイ世界」	6
3. 「ユダ的人間論」と「キリスト論」	7
4. キリスト教、聖書との取り組みについて	8
3 ドストエフスキイ、イエス像探求の足跡（１）	9
—『罪と罰』を構成する七つの要素—	
1. 「痩せ馬殺し」の夢	9
2. 「ナポレオン理論」	10
3. 血の一線の「踏み越え」	10
4. 「行き場がない」ということ	11
5. 「復活」ということ	11
6. リザヴェータ、「神の救済の経緯」	12
7. ソーニヤの「イエス像」	13
4 ドストエフスキイ、イエス像探求の足跡（２）	14
—『カラマーゾフの兄弟』、イワンの場合—	
1. 『カラマーゾフの兄弟』の基本構図	14
2. 「ロシアの小僧っ子」イワンが凝視するもの	14
3. 「大審問官」の劇詩	15
4. 「地質学的変動」の人神思想	16
5. イワンとゾシマ長老との対決	16
6. スメルジャコフと父親殺し	17
7. 「悪業への懲罰（カラ）」	17
8. 「死の床」のイワン、そして復活の光	17
9. イワンとは	18
5 討論のために	
イワンと阿閼世、裁き	19

次回「ドストエフスキイ研究会便り（２０）」について・・・20

※雑誌「現代と親鸞」からの転載にあたって、本文は雑誌掲載のままにさせて頂きました。但し数か所の表記については、加筆・修正をさせて頂きました。

「見出し」部分についても、より適した表現に変更したものがあります。

※本文に取り上げた作者の生没年や作品の制作年については、（かっこ）内に親鸞仏教センターの編集者が記して下さいました。本文中の人名に付された（かっこ）内の肩書についても、同センターの編集方針によります。

[雑誌「現代と親鸞」・第37号・本文 p.61-p.86]

ドストエフスキイ、イエス像探求の足跡 — ユダ的人間論とキリスト論 —

ドストエフスキイ研究者 芦川進一

[この原稿は、2017年3月31日、親鸞仏教センター（文京区）で開催された「現代と親鸞の研究会」での問題提起と質疑をまとめたものである。なお、文中の発言者は、センタースタッフならびにゲスト参加者である。]

事務長 ただ今より、第55回「現代と親鸞の研究会」を始めます。

本日は、ドストエフスキイ研究者の芦川進一先生にお越しいただきました。芦川先生におかれましては、お忙しいなか我々の研究会にご出稿賜りましたこと、あらためて厚く御礼申し上げます。本日、先生には、「ドストエフスキイ、イエス像構成の足跡 — ユダ的人間論とキリスト論 —」というテーマをいただきました。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは研究会に先立ち、当センター長の本多より、この研究会の趣旨を含めましてご挨拶を申し上げます。

所長 ドストエフスキイ（1821-1881）という小説家が活躍したのは、日本では明治の頃にあたり、社会主義的な問題とも出会いつつ、現代と直結する様々な課題を投げかけている作家であると、私はいただいております。本日、芦川先生はドストエフスキイを、キリスト教の人間観という角度から語って下さるということで、先生のお話を興味深く期待しております。どうぞよろしくお願い致します。

事務長 進行は飯島君にお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

飯島 [以下「司会」と表記] このたびは芦川進一先生にお越しいただき、先生が長年ご研究されてこられたドストエフスキイ世界と、その根底をなす聖書世界、そしてこれら両世界の基本的構造の問題、さらにはイエスの問題等についてご提題いただきます。

芦川先生は、西田幾多郎（1870-1945）門下の哲学者でありキリスト教思想家である小出次雄先生（1901-1990）に師事されました。ご存知の通り、西田哲学最後の第七論文集に収録されました「場所的論理と宗教的世界観」（1946）は、ドストエフスキイと親鸞（1173-1262）に関する考察で終わりますが、この西田哲学の問題軸を踏まえ、先生はドストエフスキイの思想を具体的なテキスト分析を土台に研究されておいでです。

先生はそこに聖書学的なアプローチを加えられ、教会的なドグマあるいは「使徒信条」とは違った形で、ドストエフスキイ世界の理解から「人間イエス」を浮き彫りとする作業を続けてこられました。ドストエフスキイ世界とは、人間の苦難とか病とか罪悪がギリギリにまで煮詰められた深刻な世界ですが、先生はこのような人間の闇を聖書世界、殊にイエスの生と死のドラマに重ね、それを「ユダ的人間論」として極限化し、人間が如何に光の中に摂取されてゆくのかを考察されておいでです。今日はこの「ユダ的人間論」と親鸞の「罪悪深重の凡夫」とい

う人間観とがどのように響き合うかをはじめ、先生のご提題を基に、ドストエフスキイと親鸞について、様々なテーマで出席者の間で意見の交換ができればと考えております。それでは芦川先生、よろしくお願い致します。

〔問題提起〕

① はじめに

ドストエフスキイと聖書、 そして親鸞に連なる縁

芦川 よろしくお願ひします。まず半世紀ほど前、全共闘闘争(大学紛争)の頃のことから入らせていただきます。紛争の混沌^{こんとん}の中、周囲の若者たちの例にもれず、私もドストエフスキイを読み始めたのですが、大変な衝撃を与えられました。それまで苦しんでいた自分の内の混沌とか、大学の混沌とか、日本社会の混沌とか、これら現実の混沌を遥かに超える大変な混沌がここには展開していたのです。「ドストエフスキイ体験」という言葉がありますが、私も一年ほどドストエフスキイに「やられ」ました。私は特に『罪と罰』(1866)と『カラマーゾフの兄弟』(1880)に感動させられたのですが、闇の中に射し込んでくる「光」が確実にここにはある、心からこのように感じました。「この人に随^{したが}いてゆこう！そしてこの光がどこからくるのかを突き止めよう！」。ドストエフスキイとの取り組みが始まりました。

全共闘闘争の頃には、この近くの神田では機動隊と学生が毎日のように衝突していたのですが、半世紀近く前の日本とは、その後のバブル期に至るまで、基本的には国中が「日本はどんどん豊かになる」と素朴に信じ、みんなが「所得倍増」を目指して懸命に働いた時代でした。しかしその素朴さは同時に、非常な軽薄さと無責任さをも併せ持っていたのです。私の出身は静岡県の三島市で、かつては「水の都」とも言われた所ですが、多くの大工場が富士山の雪解け水を汲み上げ、汚染して垂れ流すということが行われ、水の汚染の度合いは年々深刻になってゆきました。殆どの市民はそれに対して立ち上がりませんでした。大学をバリケード封鎖した多くの学生と同じように、私も「社会を変えなければ！外へ飛び出さなければ！」、このようないたたまれない気持ちに駆られたのでした。

その時、恩師の小出先生に言われたのです。

「社会がこのままでいい —— こんなことを若者たちが言っていて良いはずがない！
だが君ら若者たちは、ただ闇雲^{やなくも}に外に飛び出して一体何ができるというのだ？
社会を変える人間になる前に、まずは死に物狂いで勉強をしろ！
まずは親鸞聖人のようになれ！」

私の逸^{はや}る気持ちは叩き潰^{つぶ}されました。小出先生は哲学者であり宗教哲学者でもあり、ドストエフスキイと聖書の世界に向けて私の背を押して下さった方なのですが、この時先生は、私の心に親鸞聖人の名前も置いて下さったのです。



親鸞上人像（奈良国立博物館蔵）



ドストエフスキイ（ペローフ画）

親鸞聖人に関して、もう一つお話をさせていただきたいと思います。三十代から四十代の頃、少しずつですが自分の思索が進むにつれて、西田哲学のことが課題となってゆきました。小出先生が西田門下ということもあり、西田先生については折に触れお話を伺っていたのですが、小出先生が座右の書としておいでの一つが、西田先生の第七論文集「場所的論理と宗教的世界観」でした。この論文の最後は、ドストエフスキイと親鸞の考察で終わります。ドストエフスキイと聖書に取り組む中で、それまでも『歎異抄』は愛読書でしたが、この論文集に触れて、私には親鸞聖人と浄土教のことが大きく立ち現れました。京都の教学研究所におられる名和達宣さんのような親鸞の専門家も、この論文集を重要視されておいでで、私はこの名和さんの論文からも大きな感銘を与えられております。

そのようなわけで、小出先生と西田先生を介して、ドストエフスキイと聖書と親鸞聖人、これら三つの世界が私の内で不思議な縁で結ばれていることを感じるのですが、加えて今日は親鸞仏教センターにお招きをいただき、一層感慨深いものを感じさせられております。

2 聖書世界 と ドストエフスキイ世界

今日はまず私の方から聖書とドストエフスキイ世界の核として、幾つかの要点を「定義」の形で語り、その上で具体的な問題に、つまり、『罪と罰』を構成する七つの要素の検討と、『カラマゾフの兄弟』の構造の検討に進みたいと思います。敢えて「抽象」から「具体」へと、この二段階でお話をさせていただき、後半で親鸞聖人を学んでおいでの皆さんとの討論という段取りを考えております。

1. 「ロシアの小僧っ子」

まず、「ロシアの小僧っ子」という言葉から始めたいと思います。『カラマーゾフの兄弟』の中盤第五篇3で、主人公の一人である次兄のイワンが、末弟のアリョーシャに向かって言う言葉です。

「俺もお前と同じロシアの小僧っ子だ。(略)。そういう連中が飲み屋でわずかな時間を捉えて何を論じると思う？ 他でもない、神はあるかとか、不死は存在するかとかいう世界的な問題なのだ」

二十代で私が出会った最も衝撃的な言葉です。当時、大学紛争で教授たちが追放されたキャンパスは、独特の解放感を与えてくれるものでしたが、学生たちが作り出した「解放空間」とは、実際には空っぽなものでした。解放感と空虚感とに悩まされる心に、この「ロシアの小僧っ子」という言葉が飛び込んできました。「我々日本の小僧っ子たちは何をしているのだ?!」。「日本で、ロシアの小僧っ子になろう!」。青臭いのですが、私の新たな出発点でした。今も私はドストエフスキイを学ぶ若い人たちに、「求道者」としての「ロシアの小僧っ子」になるようにと常に言っています。そんなわけで、ドストエフスキイの世界はどういうものかを考える出発点として、まずそれは「神と不死を求めるロシアの小僧っ子たちの世界である」、このように提示したいと思います。

2. 「聖書世界」と「ドストエフスキイ世界」

次に聖書世界について、イワンが言う「神と不死」という言葉を用いて、以下のように定義しておきたいと思います。

聖書世界とは、

「神と不死」の問題を正面から追求する世界である。

「神と不死」の問題を、イエスという存在の生と死の中に具体的に捉える世界である。

その中心にあるのはイエスの十字架である。

恐らく聖書世界に馴染んでいない方は、冒頭からこのような抽象的な定義の連続に、少なからず抵抗を覚えられることでしょう。しかし今日は敢えてまず初めに、このような結論的な定義を提示させていただき、その上でドストエフスキイ世界の具体的な話に進みたいと考えています。もう少しご辛抱下さい。

次にこの裏返しで、ドストエフスキイ世界について定義を試みてみます。

ドストエフスキイ世界とは、

「神と不死」の問題を、「ロシアの小僧っ子」たちが正面から追及する世界である。

「神と不死」の問題を、彼らのイエス像の構成の中に具体的に捉える世界である。

その中心にあるのはイエスの十字架である。

この定義と聖書世界の定義とに共通して、「イエスの十字架」が存在することにご注意下さい。十字架上で磔殺されるイエス。あとに『罪と罰』のソーニャの例で説明しますが、ここにポイントがあるのです。このイエスの十字架を巡って、さらに二つの概念を説明したいと思います。

3. 「ユダ的人間論」と「キリスト論」

ドストエフスキイと聖書、両世界の中心にはイエスがいて、登場人物たちのドラマのすべてが、イエスの十字架上の磔殺という一点を中心に展開すると言ってよいでしょう。この十字架を巡って「ユダ的人間論」と「キリスト論」の二つの視野が生まれます。

「ユダ的人間論」とは、

師イエスを裏切り十字架上の死に追いやってしまった弟子たち、ユダやペテロたちに目を向け、その罪意識の帰趨を在りのままに捉えることで、人間の内に潜む根源的な悪魔性、つまり「聖なるもの」を否定し抹殺し去ろうとする心の闇に目を向け、そこから人間と神とキリストについて広く考えてゆく立場である。

「キリスト論」とは、

十字架上の死に追いやられたイエスの復活、つまりイエスが死を超えた「永遠の生命」を神から与えられた出来事に決定的な意味を見出し、そこから改めてイエス・キリストを介した神による人間救済の経緯、神の愛と恵みと栄光に目を向け、人間と神とキリストについて広く考えてゆく立場である。

これら二つを簡単に説明しておきたいと思います。

西田先生が「場所的論理と宗教的世界観」で記された「愛の神」という言葉を使わせて頂くと、イエスとは愛の神を説き、そして神の愛を生き、その果てにゴルゴタの十字架上で磔殺されてしまった人である、このように表現できるかと思います。福音書が記すのは、このイエスを弟子たちが裏切って十字架に追いやってしまうドラマです。そして福音書記者が読者に迫るのは、イエスを十字架の上に磔殺させたのは弟子たちばかりでない、我々人間すべてがこのユダに他ならないという認識だと言えるでしょう。これが、私が「ユダ的人間論」と呼ぶ視点で、ここから見てゆくと、福音書世界がややスッキリと見えて来るように思います。本多先生も『アンジャリ』（第33号ほか）で「真理性」と「凡夫性」ということを強調されておいでですが、この「ユダ的人間論」は、人間とは「罪惡深重の凡夫」であるという親鸞聖人の人間観ともそのまま連なるものと思われまます。

次に「キリスト論」に移りたいと思います。愛の神を説き、神の愛を生きたイエスが十字架で磔殺されてしまう。しかしイエスの生は十字架で終わらなかった、イエスは神によって死から復活させられた。—— このイエス復活という体験を、師を裏切って逃げ去ってしまった弟子たちは、何らかの形で与えられたのです。「ユダ的人間論」から見れば、弟子たちにとってこの復活体験とは、恐らく師に対する自らの恥ずべき行為への「赦し」の感受体験だったと思われるのですが、福音書はこの辺の経緯を詳細には報告しません。復活体験の感動や驚き、そして喜びの視点から（あとで説明する「キリスト論」的視点から）、主として書かれているからです。

千九百年近くが経ち、弟子たちの師イエスへの裏切りに対する絶望感や罪意識の帰趨を徹底的に描いたのがドストエフスキイであり、彼の『カラマーゾフの兄弟』とは「ユダ的人間論」を土台とした第五福音書であると思っています。

さて師を裏切った弟子たちは、このイエス復活という「体験」あるいは「事件」によって、師イエスについての新たな認識と覚醒を与えられたと考えられます。神の愛を死に至るまで貫いたイエスは、神から遣わされた「救世主」だったのだ、「神の愛」はこの地上で「キリストの愛」として我々に示されたのだ。—— 彼らの心には神の「愛と救済の経綸」がはっきりと見えてきたのだと考えられます。彼らはその新たな認識・覚醒体験をさらに新たに言葉にしてゆく。ここにパウロを中心とした「キリスト論」が生まれる。—— 原始キリスト教の誕生を私はこのように考えています。

このように「ユダ的人間論」と「キリスト論」という二つの視野から見てゆくと、新約聖書の世界は相当明確な輪郭を以て浮かび上がるように思われます。聖書と専門に取り組む人たちにとっては、これら二つはすでに常識とも言うべき視野ですが、私自身には聖書とドストエフスキイ両世界との長い取り組みから漸く得られた視野でした。キリスト教とは無縁の環境に育った私のような者にとって、また私と一緒にドストエフスキイ世界と取り組んできた多くの若者たちにとっても、聖書世界の記述はまずは非常にとらえ難いものなのです。次にドストエフスキイ世界に入る前に、聖書世界について私の体験を少しお話しさせていただきたいと思います。

4. キリスト教、聖書との取り組みについて

ドストエフスキイと取り組み始めて、私が最初に突き当たったのはキリスト教、殊に聖書の壁でした。私の師小出先生のお宅は明治初年からのプロテスタントでしたが、私はおよそ宗教などとは無縁の家に育ち、大変な壁が目の前に立ち塞がったのでした。大学の周囲を見回しても、ドストエフスキイと取り組む人たち、つまり先生方も学生の皆さんも、この問題と正面から取り組んでいるようには見えません。そんな時、自分の所属する大学院の研究室の一階上には聖書学の荒井献先生（東京大学名誉教授）がおいででした。小出先生も非常に評価されておいでで、しかも小出先生の弟子であり私の友人である佐藤研君（立教大学名誉教授）が、この荒井先生の下で聖書学を専攻していたのです。私は他学科（比較文学・比較文化）でしたが、幸い私も荒井ゼミに参加させていただくことができました。これでやっと態勢が整ったわけですが、聖書学の門外漢である私にはドストエフスキイのテキストに加え、聖書テキストと取り組み、聖書学の成果を追うという作業だけでも大変で、今もなおフーフー言いながらこれらの作業を続けている次第です。

目を啓かれたこともありました。中でも私に決定的だったことは、聖書と取り組むということとは、自分自身のイエス像を創ることに他ならないという認識を与えられたことでした。新約聖書の核となるのは、最初に置かれた四つの福音書ですが、私は最初、これらはキリスト教二千年を支える「正典」であり、何か神聖不可侵な書物であると思っていたのでした。しかしやがて解ってきたことは、これらを編集したマタイもマルコもルカもそしてヨハネも、各人がまずは自分自身のイエス像を構成しようとしていたのだという事実でした。イエスの死から四十年ほどが経って、まずマルコ福音書が創られます。マルコはイエスに関係する様々な資料や伝承を集め、それらを自らの編集方針に従って構成し直し、彼自身とその属する教団の人たちの

ために一つのイエス像を提示したのです。他の福音書も同じようにして、一世紀末にそれぞれのイエス像を組み立ててゆきました。このようなことが見えてくると、私は不思議な解放感を覚えました。同時に見えてきたのは、荒井献・八木誠一（東京工業大学名誉教授）・田川建三（大阪女子大学名誉教授）・佐竹明（広島大学名誉教授）という、聖書学の本場ドイツに伍した仕事をされる先生方も結局は、様々な福音書や偽典や伝承そして研究書と取り組まれ、その上で自らのイエス像を創ろうとされているのだという事実でした。イエスが十字架上で磔殺されてから二千年間、無数の人間がイエスとは誰か、その十字架とは何か、キリスト教とは何か、——これらの問いを抱えて聖書と取り組み、そこから自分自身のイエス像の構成を試み続けてきたのだ。そしてその中にドストエフスキイがいて、さらにその遙か末席に自分もいるのだ。——このような視野が開け、私は解放されると共に、新しい緊張感も与えられたのでした。

ドストエフスキイは、お仕着せのイエス像など絶対に書きません。一作一作、彼が直面する人間と世界と歴史の問題を正面に置き、それをイエスと聖書世界と重ねて思索するのです。一回一回、新たにイエスと取り組み直し、イエス像の構成を試み直すのです。そのベクトルは「ユダ的人間論」と「キリスト論」とが螺旋的に深まってゆく過程と言えるでしょう。私が最初に提示した「ロシアの小僧っ子」から始まる幾つかの定義は、このようなイエス像構成の流れを理解することから出てきた一つの結論、というよりは途中経過の報告とお考え下さい。後半はこれらの定義を土台として、『罪と罰』におけるソーニャのイエス像、『カラマーゾフの兄弟』におけるイワンのイエス像を中心に検討したいと思います。そのあとで親鸞聖人の世界との響き合いを全員で討論できればと思っています。

ドストエフスキイ、イエス像探求の足跡（1）

—『罪と罰』を構成する七つの要素—

まずお話しする『罪と罰』を構成する七つのテーマですが、これらはそのままドストエフスキイ世界を構成する要素であり、また我々の生自体を構成する基本的な要素でもある、このような視野の下にソーニャのイエス像を確認してゆきたいと思います。

[注。以下は配布のプリントとともに説明がなされた]

1. 瘦せ馬殺しの夢

最初の「瘦せ馬殺しの夢」とは、『罪と罰』の主人公ラスコーリニコフが、金貸しの質屋の老婆を殺す前日に見る夢です。老婆殺害に向けて興奮と錯乱の内にペテルブルクの街をさ迷い歩いていたラスコーリニコフは歩き疲れ、ある公園の茂みに横たわって夢を見ます。

七歳ぐらいの時です。彼はある祝日に父親に連れられ、郊外の教会に向かっています。町外れに居酒屋があり、その前で泥酔した農夫ミコールカが、自分の馬車を仲間を乗せ、何処かへ繰り出そうとしています。老いた瘦せ馬が引くには多すぎる人でした。馬を鞭打つミコールカは、酒の勢いもあり、どんどん自らを狂乱状態に追い込んでゆきます。そしてとうとう、彼はこの馬を殴り殺してしまうのです。酔っぱらいのすることだ、そう考えて周りで見ている人たちは傍観するだけです。一人で飛び出し、涙の内に馬を抱き締め、ミコールカに飛びかかってゆこうとした少

年ラスコーリニコフは、父親に止められ、その場から連れ出されてしまいます。「おうちに帰ろう」。

恐ろしい夢です。私はその恐ろしさを二つ考えます。一つは少年が見た人間と世界と歴史の「原姿」が、その心に^{トラウマ}傷として刻み込まれる恐ろしさです。あとでも確認しますが、『カラマゾフの兄弟』のイワンも同じような原イメージ、あるいは傷を心の奥深くに宿す青年です。イワンにとってこの地上世界とは、罪なき幼な子たちの涙に満ちた、恐ろしく忌むべき世界に他なりません。ラスコーリニコフやイワンばかりでなく、我々は誰もがこの年老いた痩せ馬の惨殺と同じ、人間と世界と歴史の恐ろしさについての原姿のイメージ、傷をそれぞれの心に持つこと、このことを喚起させてくれるのがドストエフスキイです。

この夢が我々に示すもう一つの恐ろしさとは、天使のような優しい心を持つことをこの夢で示したラスコーリニコフが、その翌日には年老いた痩せ馬の代わりに、老婆を殺害してしまう青年でもあるという事実です。人間の内なる天使性と悪魔性が一晚を挟んで現われ出る、このような恐ろしい両極性が、ドストエフスキイが人間に関して持つ基本的な認識であることを、この夢は教えてくれるのです。

2. ナポレオン理論

二番目の「ナポレオン理論」。これは一番目の年老いた痩せ馬の惨殺をそのまま延長した先にあるものとお考え下さい。ラスコーリニコフは成長して、名門ペテルブルク大学の法学部に入学します。成長した彼は、どのように人間と世界と歴史を見るに至ったのか。彼が行き当たるのはナポレオンです。英雄と崇められるナポレオン、彼は自分の好き勝手に兵を動かし、^{いたずら}徒に何万何十万を死に追いやっても平然とし、裁かれもせずに支配者として君臨している。結局この世界とは次々と「ナポレオン」たちが恣意的な支配を繰り広げる世界、まったくの不条理な世界でしかなく、哀れな痩せ馬たちが惨殺されてゆく世界なのだ。これがラスコーリニコフの結論、いわゆる「ナポレオン理論」です。

3. 血の一線の「踏み越え」

ラスコーリニコフが次に向かうのは、「自分はナポレオンであるのか、シラミでしかないのか?」、このことを試みるための思想実験です。少年時代の原体験・傷が青年になって改めて思索され直し、一つの理論にまで極限化され、その先に思想実験としての一線の「踏み越え」がなされてゆく。——ここにドストエフスキイ文学の原パターンがあります。そしてご存知のようにこの青年は、高利貸しの老婆ばかりか、折悪しく帰ってきた妹のリザヴェータまでも殺害してしまいます。

ドストエフスキイの作品世界とは、ある意味で血の一線の「踏み越え」の世界です。「踏み越え」はロシア語で「プレストプレーニエ」、刑法上の「犯罪」という意味です。『罪と罰』とは正確には『犯罪と罰』です。ドストエフスキイの主人公たちはある一線を「踏み越え」、その一線の向こうで初めて本当の罪、神の前の「罪（グリエフ）」に触れてゆく世界です。殺人ばかりか自殺・暗殺・虐待・^{りようじょく}凌辱等々、彼の小説世界は、様々な一線の「踏み越え」がなされる阿鼻叫喚^{あびきょうかん}の世界です。作者は主人公たちに「実験」をさせるのです。果たして自分は律法や戒律、法律や規範などの人間を律する一線を「踏み越え」得るのかどうか、一線を越えた向こうには何があるのか、これを実験しようとする主人公たちで構成された世界と言えるでしょう。

4. 「行き場がない」ということ

四番目は「行き場がない」ということです。一線の「踏み超え」をした先には何があるのか、この思想実験に対する答えは「行き場がない」ということです。このことが『罪と罰』において最も分かりやすい形で描き出されるのは、皆さんもご存知のように、マルメラードフという酔っぱらいの卑劣漢の生死においてです。

マルメラードフは酒に飲まれ、家族全員を零落の底に陥れ、さらには娘のソーニャを売春婦の身にまで追いやってしまうばかりか、それでも足らずに、ソーニャを訪ねて酒代までせびる卑劣漢です。ドストエフスキイは「これでもか、これでもか」とばかりに、煩惱まみれのマルメラードフ像を刻んでゆきます。そもそもマルメラードフという名前自体が「マーメラード」から採られたもので、いわば「甘ったれ野郎」です。この男を大嫌いだという人も多いのですが、たとえ彼を「甘ったれ野郎」「卑劣漢」と軽蔑して切り捨てようとしても、「ではそういうお前は何なのだ？」と切り返されれば、我々に返す言葉があるでしょうか。

このマルメラードフが、偶然酒場で出会ったラスコーリニコフに問いかけます。

「学生さん、行き場がないってことはどういうことか、分かりますか？」

行き場のない地獄で、卑劣漢が救いを求めているのです。ソーニャに有り金をせびりながら、この男が思い浮かべるのは再臨のキリストによる「最後の審判」です。——その日、まず義人や聖者や殉教者たちが招かれるであろう。「多く愛した」ソーニャも救われるであろう。だがしかし、と彼は夢見るのです、自分がそれに値などしない人間であるからこそ、神様はお前たち豚どもも来いと招いて下さるのだ。

私が聖書学を学ばせて頂いた荒井献先生のゼミで、ある時ふと先生が語り始められたのはマルメラードフのことでした。「若い時私は、マルメラードフによって信仰というものを教えられました……」。自分の信仰の原点はこの男にあること、「行き場のなさ」の痛切な自覚にあることを先生は語られたのですが、鋭利な分析と論理の上に立つ荒井聖書学の原点にマルメラードフがいると知ったことに驚き、感動しました。

ドストエフスキイの世界においては、主人公が皆、何らかの形で「行き場のない」地獄に追い込まれてゆきます。そこから何を求めてゆくのか、そしてそこで何と出会うのかが実験されるのです。『地下生活者の手記』(1864)の「地下室」、『罪と罰』の「屋根裏部屋」、『カラマーゾフの兄弟』では「修道院」とか「穴倉」。主人公たちがこれらの空間に追い込まれ、あるいは自らを追い込み、その先そこで何と出会うのか、ドストエフスキイ文学を貫く最も象徴的なキーワードの一つが、「行き場がない」という言葉であることを確認しました。

5. 「復活」ということ

ドストエフスキイの作品には、ほぼ必ず聖書テーマが登場します。例えば『白痴』(1866)ですが、この作品はH. ホルバイン (1497-1543) の絵画「死せるキリスト」(1521)を背景として物語が展開します。十字架から降ろされたイエスの死骸。ホルバインは水死体のデッサンを基にこの画を描いたと言われます。それは神々しいどころか、苦悶の底で虚空を睨むイエスの死骸です。見るも無残なこの「死せるキリスト」が果たして復活するかどうか、この問いの前で物語は展開するのです。

このようにドストエフスキイは聖書テーマを打ち出し、「行き場がない」地獄の底で蠢く人

間に、果たして「光」は射すのかどうかを追求してゆきます。『罪と罰』の場合は「ラザロの復活」です。ヨハネ福音書（十一章）において、死んですでに四日経ち、墓場で腐臭を放つラザロを、イエスが復活させる物語です。血の一線を踏み越えてしまったラスコーリニコフ、娘を始め家族を地獄に突き落としてしまったマルメラードフ、そしてこの父親によって娼婦の身にまで追いやられたソーニャ、これら「行き場のない」人間たちに果たして「光」は射し込むのかどうか、作者は我々読者を福音書的磁場に招き、一緒に考えることを迫るのです。

6. リザヴェータ、神の救済の経緯^{けいりん}

リザヴェータ。この女性は金貸しの老婆の妹で、姉が殺害される場に折悪しく帰宅し、ラスコーリニコフによって殺害されてしまいます。ただ殺されるためだけに登場するような憐れな存在です。しかしドストエフスキイの筆の力とは、このような脇役とも言うべき人物や些細な出来事をそこかしこに点在させ、それらを拾ってゆくと、思いもかけなかった一つのドラマが浮かび出るようにする、その見事な構成にあると言えるでしょう。リザヴェータもそのような存在です。つまりリザヴェータは、ラスコーリニコフに対する神からの、イエスからの、そして聖書からの呼び声の象徴として描かれているのです。

そこかしこに点在するリザヴェータ像を繋ぎ合わせてみましょう。

この女性はソーニャと一緒に聖書を読む友であり、しかも当時手に入り難かった聖書を彼女の許にもたらす存在です。ソーニャはリザヴェータのことを「神を見る人」と言うのですが、これはイエスの「山上の垂訓」から採られた言葉です。「幸福なるかな、心の清き者。その人は神を見ん」（マタイ五8）。

ラスコーリニコフが初めてソーニャの家を訪れた時のことです。ソーニャの筆筒の上には、リザヴェータがもたらした聖書が置かれていました。これに気づいたラスコーリニコフはソーニャに、「ラザロの復活」を読んでくれと頼みます。この場面から分かるのですが、彼は「ラザロの復活」が聖書のどこにあるのか知らないのです。ソーニャによる「ラザロの復活」朗読の場面とは、この青年が初めてイエスの光に触れさせられる場面として位置づけられるでしょう。殺人者の復活に向けて、象徴的な場面が点在されてゆきます。

さらにリザヴェータの姿を追ってみましょう。ラスコーリニコフは自首する前、ソーニャの許を訪れて殺人の告白をします。告白を聞いた瞬間、ソーニャの口をついて出た言葉とはこうでした。

「一緒に、十字架を負いましょう」

同時に彼女は、自分の十字架をラスコーリニコフに渡します。ソーニャは、リザヴェータから贈られた十字架を身につけ、リザヴェータを殺害したラスコーリニコフは、ソーニャの十字架を身につける。—— 三人は十字架によって結ばれるのです。

リザヴェータはなおも「登場」を続けます。八年間のシベリア流刑となったラスコーリニコフをソーニャは追い、町に住み、許される時には面会にゆき、この青年を待ち続けるのですが、彼女はこの青年の徒刑生活の始めに、リザヴェータの聖書を贈ります。その後ソーニャは聖書のことを一切口にしません。ラスコーリニコフの復活を信じ、黙って彼を待つのです。やがてこの流刑囚は涙と共にソーニャの足元に 跪き、その枕の下に隠されていた聖書が取り出され、『罪と罰』は終わります。リザヴェータとは、『カラマーゾフの兄弟』におけるゾシマ長老やア

リョーシャのように、ドストエフスキイ自身のイエスと神への信と愛が具体的な姿をとった人物であり、最深奥にあって作者のメッセージを伝え続ける存在と言えるでしょう。

ドストエフスキイ世界においては、「聖なるもの」のドラマが、地上的な「俗なるもの」のドラマと同時並行の形で提示されてゆきます。ロシア文学者の江川卓先生（1927-2001）は、これを「ヴェルテップ」劇と表現されています。これはウクライナにある独特の人形劇のことで、同時に上下二つの舞台が設けられ、一方では聖なる世界のドラマが展開し、他方では俗世界のそれが展開するという二重構造^{ヴェルテップ}をとります。このヴェルテップ構造を自覚しないと、「行き場のない」人間たちの表層のドラマに気を取られ、彼らを光に導くリザヴェータのような人物は忘れられ、ドストエフスキイ文学の最深奥にあるものが見逃されてしまう恐れがあるでしょう。

7. ソーニヤのイエス像

リザヴェータが表現する聖なるドラマを踏まえ、改めてこの作品に目を向ける時、彼女の光をまず正面から受け止めるのがソーニヤであることは明かです。『罪と罰』においてこのソーニヤこそ、ドストエフスキイが捉えるイエス像をその生において表現し、ラスコーリニコフに光を伝える人物なのです。最後に、この殺人者に復活の光が初めて射し込む瞬間を見ておきましょう。

ソーニヤが初めてラスコーリニコフの住まいを訪ねた時のことです。その前の晩、ソーニヤの父マルメラードフが泥酔の極、馬車に轢かれて死んでしまいます。偶然その場に行き合わせたラスコーリニコフは、彼を住まいに運び入れ、医者と呼ばひ、死の間際には僧侶も呼び、持っていたお金をすべてそこに置いて帰ったのでした。翌日ソーニヤは母の頼みで、この青年に礼を述べ、ささやかな法要への出席を頼むために訪れます。恐らくこの時ソーニヤは、前の晩有り金のすべてを置いて去った青年が、ある程度豊かな人物だと想像していたことでしょう。ところが尋ね当てた先とは、ラスコーリニコフの母が「棺」と呼ぶような惨めな屋根裏部屋だったのです。しばらくの沈黙のあと、ソーニヤは口を開きます。

「あなたは昨日、私たちにすべてを与えて下さったのですね」

「行き場のない」地獄で「すべてを与えて」生きるソーニヤ、彼女が見つめるのは「すべてを与えて」十字架についたイエスです。彼女は青年の部屋に入った瞬間、彼もまた「すべてを与える」人であることを悟ったのです。ラザロの墓に、初めて光が射し込む瞬間です。やがてラスコーリニコフが罪の告白をする時がきた時、直ちにソーニヤの口をついて出た言葉とはこうでした。「一緒に、苦しみましょう。一緒に、十字架を負いましょう！」。これに続くのが、先に見た十字架の交換です。殺人者の屋根裏部屋で彼女が与えられた感動が、その後作品のすべてを動かしてゆくのです。

駆け足ですが、「『罪と罰』を構成する七つの要素」というテーマでお話をしてきました。そこにあったのは、老婆殺害の前日ラスコーリニコフが見た、老いた痩せ馬惨殺の夢から始まって、イエスの十字架を見つめ、自分の命の根とするソーニヤに至るまで、「行き場のない」闇の中で蠢く様々な人間のドラマでした。これら人間と世界と歴史を支配する闇に射し込む光、死からの復活の鍵として、ドストエフスキイは「すべてを与えて」十字架についたイエスを据え、さらにこの作品の基本テーマを「ラザロの復活」として置くのです。この構図は『罪と罰』ばかりか、我々の生きる世界にもそのまま通じる基本構図と言えるでしょう。このことを次に、

改めて『カラマーゾフの兄弟』のイワンに即して考えたいと思います。

ドストエフスキイ、イエス像探求の足跡（２）

－『カラマーゾフの兄弟』、イワンの場合－

Ⅰ『カラマーゾフの兄弟』の基本構図

『カラマーゾフの兄弟』—— これはドストエフスキイの遺作ですが、ここまできるとドストエフスキイの聖書の読みもそのイエス像も深まり、四人の兄弟たちばかりか、十人近くの登場人物たちが皆、それぞれの「行き場のない」闇の中で、死と復活のドラマを演じるという大変な世界が産み出されます。しかし私は、その基本構図は先の『罪と罰』のそれと同じではないかと考えています。中でもイワンという青年の生と思索の足跡は、複雑ではありますが、この基本構図をはっきりと指し示すものと思われます。ここではイワンを追うことから、彼の背後にあるドストエフスキイのイエス像やキリスト教観を確認してゆきましょう。その過程で、改めて逐一指摘し直しますが、先に見た七つの基本的要素が確認されるはずです。

2. 「ロシアの小僧っ子」イワンが凝視するもの

冒頭でお話したように、イワンとは熱烈な「神と不死」の探究者、「ロシアの小僧っ子」です。ところが彼は、人間の持つユークリッド的知性では神は認識できないという結論に至ります。このカント的認識論的神否定に続いて彼が進むのは、神が創造したとされるこの地上世界の凝視です。すでに否定した神、その神が創造した世界を問題とする、ここに彼の矛盾があるのですが、それほどまでにイワンとは「神と不死」の熱烈な探究者、「ロシアの小僧っ子」なのです。

イワンが凝視する地上世界。それは罪のない幼な子たちが涙を流し、その涙と苦悩が一切贖われることのないままに流れてゆく不条理な世界でしかありません。ひとたび幼な子が涙を流してしまった以上、もう取り返しはつかない。「俺は神の世界を認めない!」。認識論的神否定に続く、イワンの倫理的神否定です。幼な子たちの受難に目を向け、神を痛烈に弾劾し否定するイワンとは、そのまま老いた痩せ馬の惨殺を内に抱えるラスコーリニコフだと言えるでしょう。

「報復できぬ苦しみ」と「癒されぬ憤怒」が駆け巡るだけの荒涼索漠たる地上世界。この「行き場のない」現実から「ナポレオン思想」に向かったのはラスコーリニコフでした。イワンが向き合うのは、十字架上のイエスです。

四つの福音書は共通して、ゴルゴタ丘上のイエスの十字架の両側には、あと二本十字架が立っていたと伝えます。つまりこの時、三人の罪人が十字架上で磔殺をされたのです。マタイとマルコとヨハネ、三つの福音書は三本の十字架という事実しか記しませんが、ルカ福音書は十字架上のイエスと他の二人の罪人との間で交わされた会話を報告します。ルカによればこの時、イエスを罵った左側の罪人に対して、右側の罪人は自分の罪を悔い、イエスに赦しを求めます。

「イエスよ、御国に入り給ふとき、我を憶え給へ」（ルカ二十三 42）。悔いた罪人を赦す十字架上のイエス。あとでイワンとアリョーシャとは「キリストの愛」を巡って応酬をするのですが、イワンは正にこの「キリストの愛」に心を揺り動かされたのです。そればかりではありません。イワンは感動のあまり、ルカ福音書に付加までしてしまいます。イエスは右側の罪人を抱きかかえて天に昇ってゆき、そのイエスを大天使や小天使たちが讃歌で迎え、「ホザナ！」の叫びを

上げたのだと。

ところが最後の最後になって、イワンはこの「ホザナ！」を叫ばずに終わります。彼の内なる「常識」という名の否定の精神が「ホザナ！」を拒否させてしまうのです。否定から肯定へ、そして肯定から否定へ——これが「神と不死」を求める「ロシアの小僧っ子」イワンに定められた宿命で、彼は延々とこの道を辿ります。その「肯定と否定」の往還が行き着く所、イワンの人間観とイエス・キリスト観が煮詰められたのが「大審問官」の劇詩と「地質学的変動」の思想です。ラスコーリニコフでいえば「ナポレオン理論」です。

3. 「大審問官」の劇詩

「大審問官」の劇詩とは、何よりもまずイワンのキリスト讃美であり、同時に痛烈な人間批判でもあることに注意をしたいと思います。敢えてこれを要約しますと、イワンによればイエスとは、人間が自ら神に向かうべき絶対の自由を与えられた存在であることを説いたイエスです。ところが人間は、この神に向かうべき自由を受け止めることのできない弱く愚かな存在なのです。神が与える「天上のパン」よりも、人間にとってまず大事なものは「地上のパン」であり、彼らは自分たちの代わりに自由を管理してくれ、「天上のパン」の代わりに「地上のパンを」を与えてくれる「大審問官」に嬉々として従ったのです。かくして、イワンにとって人間と世界の歴史の一切は、「大審問官」たちが人間を奴隷として支配してきた歴史であり、イエスを裏切り十字架上で磔殺し続けるユダたちの歴史に他ならなかったのです。ラスコーリニコフとイワン。二人が人間と世界と歴史に向ける目はほぼ同じであり、違いはラスコーリニコフの「斧」に代わって、イワンの手には「聖書」が握られていることだと言えるでしょう。

人間の歴史の一切は、結局イエスを裏切るユダの歴史である。このような結論に至ったイワンが「大審問官」物語の最後に描くのは、大審問官にイエスが接吻を与える場面です。ユダの裏切りの接吻に対する、イエス・キリストのユダへの接吻。西田先生はこれが、ドストエフスキイの行き着いた「内在的超越のキリスト」であり、ドストエフスキイと親鸞とが正に重なるところだとされます。罪ある人間を裁き去り、焼き尽くす神ではなく、「逃げる我々の自己を、何処までも追い、これを包む」愛の神。「何処までも超越的な神」から「何処までも内在的な絶対愛の神」へ（後述→[5](#)）。西田哲学が我々に提示する究極のキリスト像、それを介した「内在的な絶対愛の神」への展望です。

「内在的超越こそ新しい文化への途であるのである。かゝる意味に於て、私はイヴァン・カラマーゾフの劇詩に興味を有するものである」

（「場所的論理と宗教的世界観」）

さてイワンの内なる「肯定と否定」の往還は、キリストの接吻で終わりません。「大審問官」物語の最後の一行でイワンが描くのは、キリストを外に追い払う大審問官です。

「この接吻は老人の胸の内に灼きつけられていた。

だが彼は己の^{イデア}考えに踏み止まった」

（『カラマーゾフの兄弟』（五五））

イワンはまたも「ホザナ！」を否定してしまうのです。否定から肯定へ、そして肯定から否定へ。これがドストエフスキイの見つめていた人間なのだと思います。

兄の劇詩について、最初はアリョーシャも「キリストの讃美」だと称賛します。しかし彼の最後の結論はこうでした。「兄さんは神を信じていないのです」。彼は兄の内に巣くう悪魔の否定の精神を見抜いたのです。「キリストの愛」に感動したイワンを、「愛の神」には向かわせない彼の内なる悪魔。その悪魔に導かれ、「大審問官」物語に続いてイワンが行き着くのは「地質学的変動」の思想であり、ここで彼は自らを神とするのです。

4. 「地質学的変動」の人神思想

自らを神とする「地質学的変動」の思想。そのサワリの一節を見てみましょう。

「・・・いずれにせよ神も不死も存在しないのだから、この新しい人間は、たとえ全世界に一人だけしかいないとしても、人神になることが許される。またこの新しい地位に就く以上、必要とあらば、かつて奴隷的人間が持ったあらゆる旧来の道徳的限界を、平然と踏み越えることも許されるのだ。神には法律など存在しない！ 神の立つ所、即ちそこが神の座だ！ 俺の立つ所、それが直ちに至高の座となるのだ・・・《一切が許されている》、これでけりがつくのだ！」

（『カラマーゾフの兄弟』（十一 5）

ドストエフスキイはイワンに「人神」を宣言させ、悪魔の否定の精神を完成させるのです。ラスコーリニコフの「ナポレオン理論」が行き着いた先がここであるとも言えるでしょう。

5. イワンとゾシマ長老との対決

人神思想を携え故郷の家畜追込町に戻ったイワンは、二つの実験に乗り出します。一つはゾシマ長老との対決です。神への信と愛に生涯を賭け、修道院で「キリストの御姿」を守る聖者ゾシマ。その庵室で繰り広げられる対決は、ここでは扱えませんが、イワンの完膚なきまでの敗北に終わります。作者は作品の始まり近く（第二篇）で、すでにイワンの人神思想の行く末を予告するのです。注目すべきはゾシマ長老が、イワンが「肯定と否定」との間に魂を引き裂かれた「ロシアの小僧っ子」であることを見抜き、彼に言い聞かせる言葉です。

「肯定的な方向に解決されない限り、決して否定的な方向にも解決されません」

（『カラマーゾフの兄弟』（二 6）

ゾシマ長老にこの言葉を語らせるドストエフスキイが、彼自身如何に深くこの問題に苦しみ、そしてこの究極の答えに行き着いたかを思うべきでしょう。

続いてゾシマ長老はイワンに、パウロの言葉と共に次のような励ましの言葉を贈ります。

「このような苦しみを苦しむことのできる崇高な心をあなたに授けて下さったことで、創造主に感謝することです。《高きを^{おも}惟ひ、高きを求めよ。我らが住居は天にあり。（コロサイ書三 2, 1／ピリピ書三 20）。神があなたの心の解決を、あなたがまだ地上にある内に、あなたにお与えなさるように。そして神がどうかあなたの道を祝福なさいますように！」

（『カラマーゾフの兄弟』（二 6）

イワンの行き着く先が指し示された言葉と考えるべきでしょう。先に我々は『罪と罰』の各所に点在するリザヴェータに関する叙述を繋ぎ合わせてゆくと、神の救済の経綸が浮かび上がってくることを見ました。『カラマーゾフの兄弟』においてもまた、この作品を縦に貫く聖なる縦糸としてドストエフスキイが織り込んだのがゾシマ長老であり、その兄のマルケルであり、ゾシマを師とするアリョーシャ、これら三人と考えられます。

6. スメルジャコフと父親殺し

さてもう一つの実験、イワンが故郷で乗り出すのは父親のフォードル殺しです。先に私は「斧」を手にしたラスコーリニコフに対し、イワンとは「聖書」を手にした青年であるとしました。しかしイワンもまた、結局は彼の「斧」を手にするのです。そしてこの作品の恐ろしさ・複雑さとは、イワン自身は父親殺しに手を染めないこと、代って彼の異母兄弟であり下男であるスメルジャコフが、血の一線の踏み越えを果たすことでしょう。イワンは、「一切が許されている」とする人神思想に感動したスメルジャコフに、父親殺しの教唆をしたものの、間もなく主従関係は逆転し、下男スメルジャコフが「前衛的肉弾」として、一人父親殺害を執行するのです。そして二人が放り込まれる「行き場のない」地獄。懼るべき「悪業への懲罰」(後述→7)の末に、それぞれが如何にして神との出会いに至るか、このドラマもまたラスコーリニコフのそれと読み較べることで、我々は『罪と罰』から『カラマーゾフの兄弟』に至るドストエフスキイの思索の深まりと、その基本的な構図の相似を確認できるでしょう。

7. 「悪業への懲罰」

さて父親殺しの二人が追い込まれる地獄のドラマを、今「悪業への懲罰」と言い表しましたが、これはゾシマ長老とイワンとの対決の際に、長老がイワンの将来について予言する言葉です。人間が犯した罪は如何に清算されるのか、この問題を巡る議論の際に長老は、人間の罪は決して誤魔化すことはできない、その罪人の良心に必ず神の裁きが臨むのだと語ります。これが「悪業への懲罰」、あるいは「キリストの律法」です。私は「カラマーゾフ」の「カラ」とはこの「悪業への懲罰」から取られたものであろうと考えています。ラスコーリニコフからイワンとスメルジャコフに至るまで、ドストエフスキイは、罪人の良心に臨む怒りと裁きの神、その「悪業への懲罰」にひたすら目を凝らし、その先に射し込む「キリストの愛」と「神の愛」を見出そうとした作家だと言えるでしょう。

8. 「死の床」のイワン、そして復活の光

「悪業への懲罰」の末に、いよいよイワンは、スメルジャコフから己の罪を決定的に悟らされ、神に見つめられる自分の発見に至ります。「ロシアの小僧っ子」イワンの旅はここに終わったかに見えます。ところがドストエフスキイは、さらにイワンに過酷な運命を課すのです。スメルジャコフが自殺することを知りながら、イワンは彼をそのまま置き去りにして去ってしまいます。そして翌日裁判の場で、自らの罪を自白すると共に、イワンの人格は解体し、彼は「死の床」に就くのです。イワンの上に射し込むであろう未来の光、これをドストエフスキイは、イ

ワンを「死の床」に沈めた遙か先に見据えているのです。

イワンに射し込む光。書かれずに終わった後編において、イワンが死の床から立ち上がるであろう徴、これをドストエフスキイは幾つか読者に示しています。ゾシマ長老がイワンに贈るあの励ましの言葉もその一つですが、中でも注目すべきは、前編最後の「エピローグ」において、長兄のドミートリイがアリョーシャに語る言葉でしょう。

「聞け、兄弟イワンは全員を超える。生きるべきは彼で、俺たちではない。
彼は回復する」

(『カラマーゾフの兄弟』(エピローグ・2))

前編を書き上げた直後、ドストエフスキイはこの世を去ります。神を否定し、「キリストの愛」を斥け、父親と異母兄弟とを死に迫りやり、自らの人格まで解体させるという言語に絶する過酷な運命を体験したイワンが、果たして如何にしてその「死の床」から立ち上がるのか、想像することは至難です。ドストエフスキイは我々読者に、イワンの新たな生について自ら考えるよう迫ったのだと考えるべきでしょう。『罪と罰』においてもこの作家は、シベリアで聖書を手にしたラスコーリニコフの未来を、我々の手に委ねたのです。

9. イワンとは

私がドストエフスキイから教わったことは、まずは「ユダ的人間論」でした。そしてこの「ユダ的人間論」を最も激しく生きて表現するのが「ロシアの小僧っ子」イワンであると思っています。今日この場で、彼に関わる問題のすべてを扱い切ることはできませんでしたが、大きな見取り図はお示しできたかと思います。最後に改めてイワンとはどのような青年であるかを纏めておきたいと思います。

イワンとは、

悪魔の否定の精神とともに、「神と不死」の問題について「肯定と否定」「信と不信」「光と闇」の分裂・矛盾に身を曝し、神を否定し、イエスを斥け、父を殺害させ、兄弟を死に迫りやり、その没落と「悪業への懲罰」を通して、イエスとその十字架が持つ「ユダ的人間論」と「キリスト論」とを共に浮き彫りにする存在である。

ドストエフスキイの世界は複雑で混沌としたカオスです。しかし最初に確認した幾つかの基本的概念や、『罪と罰』を構成する基本的要素を踏まえ、またこの世界が聖と俗の「二重構造」を持つことを踏まえて見てゆく時、その構成はむしろ単純直截であると言えるのではないのでしょうか。「単純直截」と言うのは、その一作一作が、遺作の『カラマーゾフの兄弟』に至るまで、人間と世界とその歴史を向こうに置き、究極の真実を求めて繰り広げられる真剣勝負の世界であるという意味においてです。

5 討論のために

イワンと阿闍世、裁き

私は「イエスの十字架を通じた救済」と「弥陀の誓願による摂取」とは、果たしてどこが重なり、どこが違うのかという問題に非常に関心があり、この二つの救済原理について、今日は是非皆さんのお話をお伺いしたいと思って参りました。

長い間私が問題にしてきたのは「ユダ的人間論」、あるいは「人間の中の悪魔性」についてです。我々人間の内なる「悪魔性」「罪性」は果たして根絶され得るのか、またそれは如何にしてかという問題です。浄土教の「弥陀の誓願」による「罪惡深重の凡夫」の摂取、私にはこれは見事な救済原理として完成しているように思われます。そして『罪と罰』のソーニャやリザヴェータの例でお話したように、キリスト教のイエスの十字架もまた、私には見事な救済原理だと思われます。しかしラスコーリニコフやイワンが目を釘付けとされ、弾劾したように、世界には今もなお無辜の血と涙が流され続けています。我々の世界、我々の内面とは結局、このような「行き場のない」地獄でしかないのか、果たして罪は克服され根絶されたのか、「ユダ的人間論」と「キリスト論」、そして「罪惡深重の凡夫」と「弥陀の誓願」との関係は改めてどうなのか、—— 堂々巡りの青臭い青年の問いと議論のようですが、今日は全員が「ロシアの小僧っ子」として、改めてこれらの問題について話し合えればと思っております。

もう一つ、私にとって大きな問題は「裁き」の問題です。浄土教とキリスト教の救済観において、「罪」と「救済」との間に、「裁き」は如何なる形で存在するのかという問題です。

ルドルフ・オットー（1869-1937）や西田哲学が宗教体験の極として挙げるのは、旧約の預言者イザヤが神と出会う瞬間です。

「禍^{わざわひ}なるかな、我亡^{ほろ}びなん、我は穢^{けが}れたる唇のものにて、穢^{けが}れたる唇の民の真中に住むものなるに」

（イザヤ書六 5）

このように、イザヤにとり神と出会うということは、その裁きとか怒りのリアリティに身を曝すこととして捉えられていて、自分が「穢れたる唇」の者として絶滅させられる体験だったのです。彼にとり救済とは、自分を摂取してくれる、愛で包み込んでくれる神との出会いというよりは、まずは怒りで焼き尽し裁き去る神の現前だったのです。西田先生は、イザヤが出会ったのは怒りと裁きの神であり、これを「外在的超越」の神であるとします。他方、親鸞やドストエフスキイが未来の宗教として示すのは、罪ある人間をどこまでも追って包み込み摂取してくれる愛と赦しの神と弥陀であり、これを「内在的超越」の神と弥陀であるとしています。

恩師の小出先生は、「哲学的宗教的思索の土台として芸術体験が何よりも大事だ、殊に二十代はベートーヴェンを聴いておけ」とよく語っておいででした。バッハとは違い、ベートーヴェンの音楽は「焼き尽す怒りと裁きの感覚」と言うしかない圧倒的爆発的リアリティを以って迫ってきます。このような「裁き」の超越^{リアリティ}感覚というのは、浄土教とキリスト教の救済原理の中でどのように位置づけられるのか、この問題も語り合えればと思います。

長い時間、有難うございました。

前半・[問題提起]・了

次回「ドストエフスキ研究会便り（20）」について

★次回は「後半」として、今回の「問題提起」を受け、親鸞仏教センターの研究員の皆さんとの間で行われた「質疑応答」の記録を掲載します。

★センターの皆さんは、予め私のドストエフスキ論をお読みにになり、池袋にある河合文化教育研究所を訪問され、私に様々な質問をされ、更に湯島のセンターでは予備討論もなさったとお聞きしました。センターで研究会が開かれる時には、常にこのように周到な準備がなされるようです。

★この真摯な皆さんが、ドストエフスキと聖書に関する私の「問題提起」を受けて、次々と発された様々なご質問やご意見は、私にとって教えられることが実に多く、今後の研究に対して大きな刺激とヒントを与えて頂きました。

★この「質疑応答」をお読みになる皆さんもまた、ここから様々な発見と刺激を与えられることでしょう。このことが、日本に於けるドストエフスキと親鸞、キリスト教と浄土教の相互理解の出発点になることを心から願っています。

★そのためにも、今まで「ドストエフスキ研究会」が大切にしてきた学びの姿勢として、まずは皆さんが今回のドストエフスキと聖書に関する私の「問題提起」と暫くの間取り組んで頂き、次回の「質疑応答」に触れる前に、自分自身の思索を試みて頂きたいと思います。 そのことで、皆さんとセンターの研究員の皆さんとの、間接的ではあれ、実り豊かな対話も可能となるのではないのでしょうか。